



Title	磨選機型低速浮選機
Author(s)	高桑, 健
Citation	北海道大學工學部彙報, 1, 186-194
Issue Date	1948-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/40447
Type	bulletin (article)
File Information	1_186-194.pdf



[Instructions for use](#)

磨選機型低速浮選機

教授 高 桑 健

“Gri-Con” Mill Type Low Speed Flotation Machine

Prof. Takeshi Takakuwa.

This flotation machine is invented by the author. Its merits are ; (1) the construction is simple (2) the speed is very low (3) the flotation action is very good (4) the power consumption is small. Therefore, a flotation machine far larger than used at present can be constructed. A large machine with a rotor of 3m dia. and 2m width is under construction at Ūbari Coal Mine, as it is very desirable at a coal preparation plant to have a machine with a large capacity. Another test as a unit (flotation) machine in a grinding circuit to avoid the harmful overgrinding will be done in this year at the Itomuka Mercury Mine. It is believed that this machine is very suitable for such a rough work.

目 次

A. 緒 言	186
B. 構造及び作用	187
C. 鑛石に対する実験	190
D. 石炭に対する実験	192
E. 結 び	193

A. 緒 言

現在主として用ひられてゐる浮選機の M-S “Sub-A”, Denver “Sub-A”, Fagergren 及び K. and K. 浮選機に於ける空気混和は、① パルプの激しい攪拌と、② 高速回転体の背面に生ずる空虚のために空気がパルプ中に吸ひ込まれることによるのである。従つてインペラー或は回転子の周速速度の大きいことが必要である。これらの機械に於ける回転体の回転数及びその周速速度は第 1 表に示された通りである。この様な回転状態であるために回転部分の磨耗が激しく、且つパルプの激しい運動のために容槽内面の磨滅も亦激しい。又 K. and K. 機以外の機械では回転軸の支持點が回転体の重心から可なり離れてゐるために回転部分が均衡を失しない様に特に留意して製作又は修理せられても、運転を續けてゐるうちには、どこかに緩みが出来たり或は回転部分が不均衡に磨耗したりするために振動が起り、それが機械全體に波及して機械全體が損傷して來る。これを避けるために回転を落すことは、起泡力が弱くなるので許されない。

非常時中は資材及び労力が甚しく不足したので浮選機其他の補修及び部分品の入手が極めて不如意となり、その終末期の近くでは、加速度的に運轉が順調を缺き、生産に重大な結果をきたす徴候が現れて來た。著者はこの危局に應ずる策について考慮を廻らし、浮選機について結局ここに記述する様な速度が遅く且つ容易に製作出来る機械を創案し、直ちに研究室員の手によつて、有り合せの資材を集め、實驗用の機械を作製し、昭和20年12月三菱手稻鑛山選鑛場で實驗に着手した。その後寒氣のために實驗を中止してゐたが、昭和21年4月初旬再開して、一應の試驗を終了することが出来た。その後夕張炭鑛第二坑選炭工場に移動して石炭用としての試驗を行つた。本機はその形が著要發明の磨選機¹⁾に似てゐるので磨選機型低速浮選機²⁾と名づけた。

本實驗には手稻鑛山長千葉健太郎氏、同選鑛課長鐘ヶ江次郎氏、同課員折原偉佐夫氏、當時の夕張鑛業所長竹鶴可一氏、選炭課長仲田行雄氏、同課員新川一氏、同工作所員、設計課員、選炭工場員等の絶大の援助を得た。又當初に於ける機械の作製及び据付けは特に寒氣の酷しい時にあつたのであつたが研究室員島田助手、長澤、霜田兩雇の献身的努力によつて順調に進められた。特に記して厚く感謝の意を表するものである。

B. 機械の構造及び作用

第1圖は最初の實驗に用ひられた機械の縦断面圖、第2圖は平面圖、第3圖は正面圖である。第3圖では機械の前面の突出した部分(他の圖面に(B)と記してある)を除いてある。各圖について同じ符號は夫々同じ部分を示す。

水槽(A)の中に、水平軸で回轉する大きな圓筒形の回轉子(C)がある。この回轉子の周圍には水を汲み上げるバケツの役目をする細長い箱が多數ついてゐて、結局回轉子の形は水車の様な形に

第1表 浮選機の高轉速度

浮選機の種類	インペラー 又は回轉子 の直徑	回轉數	周邊速度
	inches	r.p.m.	ft/min.
M-S "Sub-A" ¹⁾	12	460	1445
	15	375	1475
	18	320	1508
	24	230	1445
M-S "Sub-A" ²⁾	12	450	1414
	15	360	1414
	18	300	1414
	21	260	1429
	24	220	1382
Denver "Sub-A" ³⁾	12	550	1728
	15	400	1571
	18	350	1649
	21	290	1594
	24	252	1583
Fagergren ⁴⁾	7	1200	2199
	9	900	2122
	11	750	2160
	14	600	2199
K. and K. ⁵⁾	30	160~200	1250~1570

1. Richards and Locke, Text book of Ore Dressing, N.Y. and London, 1940, p. 255.
2. Ph. Rabone, Flotation Plant Practice, London, 1936, p. 86.
3. 同上, p. 89.
4. 同上, p. 97.
5. A.M. Gaudin, Flotation, New York, Pa., 1932, p. 394.

1) 特許第129453號。

2) 高桑健, 日本鑛業會誌, 53卷, 627號, (昭和12年7月), 460頁。

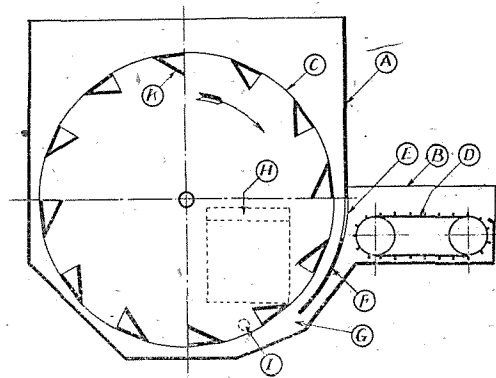
3) 特許第175402號。

なるのである。水槽の前面に連絡して泡沫室(B)がある。実験ではこの図の様な形の泡沫室を用いたがこれは尖函の形にしてもよいことは明かである。水槽中のパルプの量は、そのパルプ面が回轉子(C)の軸が水槽(A)の側壁を貫通する孔の下にあつてその孔からはパルプが漏れ出ない程度に保たれる。

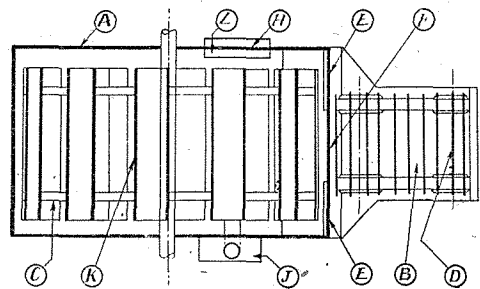
水槽(A)と泡沫室(B)とは仕切板(F)によつて仕切られ、水槽中のパルプの攪亂状態が泡沫室に波及しない様になつてゐる。その仕切板の下端は第1圖及び第3圖に示された様に水槽の底までは達せずして通路(G)を残す程度になつてゐる。又その仕切板にはパルプ面の高さで兩側壁に近い所に窓(E)があつて水槽(A)と泡沫室(B)の上方水面部分に於ける連絡路となつてゐる。泡沫室(B)の中にはスクレーパーコンベヤー(D)があつて、その上側は大體パルプの水面に一致し、下側は泡沫室の底を擦る様になつてゐて、上側はパルプ面上に出来た泡沫層を前方に押しやつて精鑛として排出し、下側は洗んだ砂を水槽(A)の方に送り返す役目をする。この部分は簡単な分級尖函の形にすることが出来、現在はこの尖函の形としてゐる。

パルプは水槽の側壁に設けられた給鑛管(J)から入り、反対側に作られた排鑛口(H)及び(I)から出る。砂の細かい部分は上の排鑛口(H)から溢れ出て、粗らくて溢れ出ない様な砂は下の排鑛口(I)から出る。水槽内のパルプ面の高さは排出口(H)の溢流線の高さによつて定まる。パルプの給量が急に増加して水槽中のパルプの水面が上昇し、泡沫室前面の浮游精鑛泡沫の出る所から溢れ出て精鑛に混合して、精鑛品位を損ふ様なことのない様に、排出口(H)の溢流線を出るだけ長くつてある。水槽中のパルプ面の上の泡沫層が排鑛口(H)に到達しない様に排鑛口(H)は(L)なる垂直の板で圍まれ、この通路によつて排出せられるパルプは水槽内の深い所から導き出される様になつてゐる。

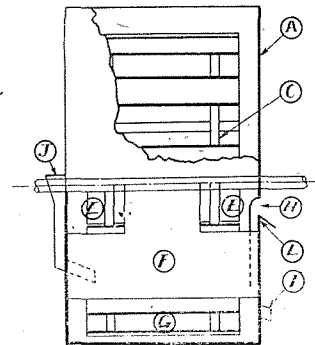
回轉子の周邊についてゐるバケツの役目をする箱(K)は断面が三角形で、その一邊が開いてゐる。



第 1 圖



第 2 圖



第 3 圖

る細長い三角箱で、回轉子の周邊上に一定間隔についてゐる。回轉子は水平の回轉軸に2枚の丈夫な圓板をやや離して固定し、その圓板の周邊を三角形に切り取り、そして前記の三角箱(K)を嵌め込み固定して範形を作らせたものである。

回轉子は第1圖に矢で示した方向に回轉し、その回轉速度は同徑のボールミルに於ける臨界回轉速度を越さないことを標準とする。従つて従來の浮選機に於ける回轉速度に比較すれば極めて低いものである。現在の浮選機中最低速なる30吋160 r.p.m.のK-K浮選機でも、周邊速度は1250ft/min.であるが本浮選機では回轉子の直徑1m、回轉數40/min.とすれば、その周邊速度は412ft/min.にすぎない。回轉中は、三角箱が圖の左に來た時にパルプを汲み上げ、右の方に來る途中で、三角箱の中のパルプは流れ出て、右の方に來た時には三角箱は空になつてゐるので、三角箱の中に空氣が入つたままパルプの中に入り、回轉が進むにつれてパルプ中で三角箱は上向きになるために、その中の空氣はパルプ中に放出せられ、起泡の役目をする。空中で三角箱からこぼれ落ちたパルプはパルプの面に突きあたりカスケード法と同様にしてそこに起泡作用が現れる。又パルプ中を大きな三角箱が出入りするるのであるからパルプは相當激しい攪亂作用を受け、これによつても起泡作用が生ずる。この攪亂作用はパルプを上下に引つくり返して空氣とパルプを混合する様な性質のもので極めて徹底的な攪亂作用である。三角箱が空中から水中に入る時にはその背面に空虛が出來、そのため空氣がパルプ中に引き込まれ、このためにも水中に泡が出来る。これら數種の作用の合作用によつて起泡せられるのである。

三角箱が水中に入る時には口が下向きになつてゐて箱の中には空氣が入つてゐるから、その空氣がクツションの役目をして、三角箱が水面を打つために受ける力を緩和する。

回轉子の回轉速度を大きくすれば、三角箱内のパルプは遠心力によつて飛び出してしまふのみならずパルプが回轉子についたままの状態に回轉し、パルプが空中を通つてパルプ面に落ちたり、パルプ中を三角箱が動いて攪拌することに依つて起る上下ひつくり返しの攪亂作用や、それによつて起る起泡作用もなくなり、起泡作用等が極めて不十分になる。

回轉子回轉のためにパルプ面の一方が高くなり、高くなつたパルプはパルプ面に沿つて流れ下りここに表面流が出来る。その流れの方向は泡沫室に向ふ。パルプ面に出來た泡沫層はこの表面流のために泡沫室に向ひ、仕切板の兩側にある窓(E)から泡沫室内に入る。一方水槽内の下底では前記表面流の逆の方向に向ふ流れが出来る。泡沫室で泡沫から落ちて底に沈んだ砂はスクレーパーコンベヤーで水槽の方に送られ、仕切板と水槽の底との間にある通路(G)に達し、この水槽中の底の流れによつて水槽内に引き込まれ、水槽内の浮選作用を繰り返して受ける様になる。

泡沫室は第2圖に示された様に水槽よりも幅が狭い。第2圖に明かな様に兩者の連絡部の側壁は主軸線に對して斜になつてゐる。水槽中から激しい勢で出て來たパルプはこの斜の側壁に衝突してその勢を殺がれ、比較的靜かに泡沫室に入る。泡沫室のスクレーパーコンベヤーの速度によつて泡沫が泡沫室中に滯留する時間が調節せられる。滯留時間を長くすれば、泡沫の消滅融合の度が

高くなって泡沫層の上部の品位が高められ、従つて精鑛の品位は高くなる。この泡沫室は既述した様に尖函の形にしてスクレーパーコンベヤーを用ひない様にすることも可能である。

C. 鑛石に対する實驗

普通に考へられる實驗用浮選機程度の大きさでは、本浮選機の作用を十分發揮せしむることは不可能であると考へられるので、大型の中間試験機程度の大きさのものを試作して、三菱手稻鑛山の選鑛場に据えつけて、同選鑛場の主系統の粗選機へのパルプを分割して本機に供給して試験を行つた。

機械の大きさは、回轉子の外周直徑 1 m, 回轉數は 40, 36, 32 r.p.m. の 3 段に變へられる様にした。その周邊速度は夫々 412, 371, 330 ft/min. である。回轉子の周邊についてゐる三角箱の長さは 770 mm, その數は 12 箇, その斷面の三角形は底邊 86 mm, 2 邊 120 mm の二等邊三角形で底邊の所があいてゐる。この一つの三角箱の容量は約 4.4 l である。三角箱を保持する 2 枚の圓板の間隔は 480 mm である。従つて三角箱の兩端は 110 mm だけ角の様に圓板の外に出てゐる。水槽は前記 2 枚の圓板によつて三つの部分に區切られるが、その間の流通をはかるために圓板には相當數の孔があけてある。回轉子の三角箱によつて汲み出されるパルプの量はその回轉數 40, 30, 32 r.p.m. に於て夫々毎分 210 l, 189 l, 168 l である。これらの割合を求むれば夫々 100, 90, 80 となる。

水槽は奥行 1110 mm, 幅 950 mm で底の部分は多角形となつてゐる。水槽の前面に連接してある泡沫室は長さ 560 mm, 幅 490 mm, 深さ 200 mm である。尾鑛排出口の溢流線は回轉子の軸の中心から約 100 mm の下の所にあたる。回轉子の三角箱の端は水槽の側壁から約 200 mm 離れてゐる。

水槽中のパルプの量はバケツで水を汲み入れて實測した結果は約 480 l となつた。回轉子が回轉すれば、既に記述した様にパルプは回轉子の三角箱によつて高く汲み上げられるので、槽内に保持せられるパルプの量は静止の時に比較して増加する。槽内のパルプ面は機械の運轉中は激しく動揺し、パルプ充満の限界を正確に見極めることが困難であるために正確な實測は不可能であつたが數回の實測の結果は大體次の様な値を得た。

32 r.p.m. の時	槽内パルプの増加量	20 l
36 r.p.m. の時	槽内パルプの増加量	22 l
40 r.p.m. の時	槽内パルプの増加量	25 l

即ち運轉中は機内には約 500 l のパルプが保持せられてゐるのである。既述した様に回轉子の回轉によつて三角箱のために汲み出されるパルプの量は回轉數によつて異なるが、今 40 r.p.m. の時を取れば 200 l/min. である。即ち全量約 500 l の槽内パルプは 2.5 分毎に 1 回空氣中に汲み出される機會を得ることになる。

清水を入れて各回轉數の時の起泡沫状態を見るに、32 r.p.m., 36 r.p.m. 及び 40 r.p.m. では殆んど差異は認められず、泡沫室に泡沫がよく進出するけれども、回轉數を 48 r.p.m. にした時には水が回轉子に附着したまま回轉する様になり、泡沫室へ泡沫が進出することが殆んど認められなかつた。

然しこの回転数でも、浮選パルプを供給し、起泡剤で起泡すれば、槽内で續々と發生する泡沫が前に出來た泡沫を泡沫室へ押し出すために浮選機としての作用は行はれるものと考へられ、豫備實驗の結果もその通りであつたが既記した理由によつて 40, 36, 32 r.p.m. で實驗を行つた。

運轉は數時間連続したけれども、試料の採取は恒常状態に達したと判斷せられる様になつた時に1回行はれた。採取した試料について金銀銅の分析を行ひ、次の第2表の様な結果を得た。この結果からは、回転数の變化による浮選作用の變化を認めることが出來なかつた。第2表下段の粗選第1槽の産物といふのは、参考のために實驗當時同選礦場主系統の Denver "Sub-A" 粗選第1槽から瞬間的に採取した試料についての結果である。

第2表 各産物の品位

番 號	回 轉 數 r.p.m.	原 鑛 品 位			精 鑛 品 位			尾 鑛 品 位		
		Au g/t	Ag g/t	Cu %	Au g/t	Ag g/t	Cu %	Au g/t	Ag g/t	Cu %
1	40	1.2	25.4	0.26	14.8	304.3	2.73	0.6	13.0	0.07
2	36	2.6	33.6	0.28	14.0	311.5	4.52	1.8	18.6	0.07
3	32	2.2	46.4	0.22	23.5	438.5	7.23	1.4	27.5	0.06
4	32	1.6	27.8	0.34	11.5	239.0	5.57	1.0	16.0	0.07
5	36	2.8	40.8	0.33	25.0	428.5	5.28	1.4	20.0	0.08
平 均		2.08	34.80	0.286	17.76	344.36	5.07	1.24	19.02	0.07
粗選第1槽の産物		—	—	—	16.5	248.0	—	2.0	34.0	0.12

試料の採取は瞬間的であり、原鑛、精鑛、尾鑛を殆んど同時に採取する様にして行はれた。大きなバットを各産物の流れる樋の落ち口へ差し入れてパルプを受取り、そのまま秤量し引つづき電氣乾燥器で乾燥し再び秤量して産物中の水量を知り、風袋の重さを別に秤つて乾燥試料の目方を知り、それから夫々のパルプ濃度を算出した。精鑛については、その産出量を知るために試料採取の時間を常に1分30秒と定めた。此くして求められた各實驗に於けるパルプ濃度及び精鑛量は次の

第3表 パルプ濃度及び精鑛量

番 號	パルプ濃度 (固體:パルプ, %)			精鑛量 kg/hr.
	槽内原鑛 パルプ	精 鑛	尾 鑛	
1	20.0	22.4	27.4	23.2
2	39.6	37.8	41.2	53.4*
3	32.1	28.2	32.9	21.2
4	10.1	29.4	31.5	25.2
5	27.1	25.9	17.1	15.8*
平均	20.9	28.7	32.8	23.2

* 印は平均の計算に加へなかつた。

第3表に示された様な結果となつた。

今第2表に示された平均品位をもとにして、回収率及び選鑛比を計算すれば第4表の様な結果となる。

第4表 回収率及び選鑛比

	回収率(%)	選鑛比
金について	43.4	19.65
銀について	48.1	21.1
銅について	76.5	23.1
平 均		21.3

第3表の精鑛
産出量の平均及び
第4表の選鑛比の
平均から原鑛の給
量を計算すれば
495 kg/hr. となる。
第3表の原鑛のパ

ルブ濃度の平均を30%とすれば、原パルプ給量は1650 kg/hr.となる。パルプ濃度30%の時のパルプの比重を1.23*とすれば、原パルプの給量は容積で1340 l/hr.となる。既知の通り槽内には約500 lのパルプが存在するのであるから、本実験ではパルプの槽内滞留時間は約2.7分間となる。

手稻鑛山選鑛場では浮選機としてDenver "Sub-A" 式を用ひてゐる。その各1槽についてのパルプ滞留時間は粗選區では3分間、片双處理區では10分間、精選區及び清掃區では各5分間であつて、各系統に於ける總滞留時間は粗選系統では46分間、清掃系統では32分間、片双處理系統では1時間20分が標準となつてゐる。

同選鑛場の實績と本実験の結果を比較して良否を判断することは、現段階では出来ないけれども、本実験は浮選の粗選第1槽に相當した種類の仕事であるから、第2表に示された5實驗の平均とその下段の付記にある粗選第1槽の産物の品位とを比較すれば、本機の方が精鑛品位高く尾鑛品位低し。故に本機は浮選作用において少なくともDenver "Sub-A" に匹敵せしめ得る程良であると斷じ得られる。

本実験に用ひた電動機は200 Volt 9.3 amp. (3 HP) 59 r.p.m. の geared motor である。本浮選機に水を入れないで空運轉をした時は5.2 amp. (約1.7 HP) の電流が通り、パルプを入れて正規の運轉をすれば40 r.p.m. の時には7.5 amp. (約2.4 HP), 36 r.p.m. の時には6.9 amp. (約2.2 HP), 32 r.p.m. の時には6.3 amp. (約2 HP) の電流が流れた。即ち回轉數によつて所要動力に差があり、40 r.p.m. の時を標準にとれば36 r.p.m. の時はその92%, 32 r.p.m. の時にはその84%である。

Denver "Sub-A" 浮選機で本機と略同様な容積を有するNo. 18 Denver "Sub-A" 浮選機について見れば、その容積は495.5 l (本機では500 l と推算せられた)、電動機の馬力は1槽當り2.0 HP, 4槽を用ひた場合の處理容量は45~70 t となつてゐる**。本浮選機の本実験に於ける處理容量は計算上既記の様に495 kg/hr. であつて、これを24時間當りとすれば11880 kg, 4槽を用ふればその4倍になるものとすれば、24時間に47.52 t となる。

上述の様に浮選作用でも、所要動力量でも、處理容量でも、Denver "Sub-A" 機に匹敵すると認められる。

第5表 原鑛の篩別試験の1例

	大 小 (メツシ)					計	
	+ 65	65~100	100~150	150~200	- 200		
本実験に於ける産物等の篩別紙試験の結果の1例を示せば次の第5表の通りである。	浮選精鑛	2.15	31.08	5.01	7.75	54.11	100.00
	浮選尾鑛	43.85	13.10	5.25	4.17	33.53	100.00
	浮選原鑛	26.67	35.18	4.26	2.35	34.53	100.00

D. 石炭に對する實驗

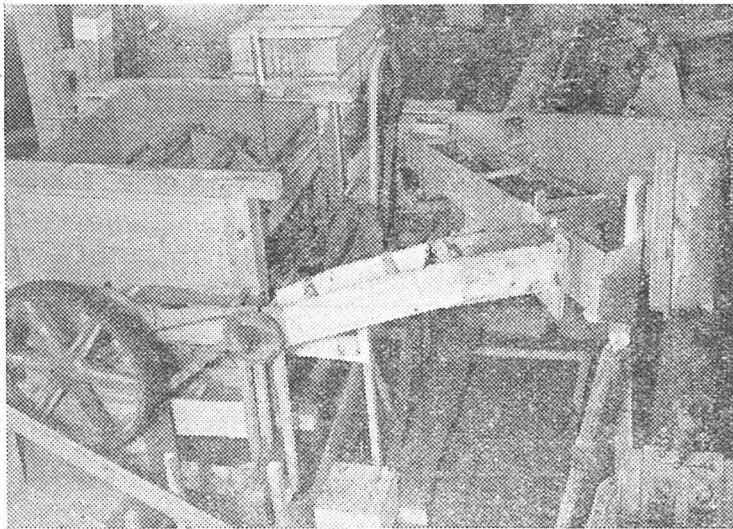
手稻鑛山に於ける實驗後、この機械を夕張炭鑛第2坑選炭工場に移設して石炭に對する實驗を

* 印は手稻選鑛場に於ける標準値。

** 印, Richards and Locke, Textbook of Ore Dressing, 3rd Ed. 1940, p. 256

3 m, 幅 2 m の回轉子を有する様な大きさのものを作製することが可能である。

選鑛の磨鑛系統に於ける過碎防止法として、ボールミルと分級機の上に浮選機を用ふることは有効なことであり認められてゐる。この目的に用ひられる浮選機は激しい磨耗に耐えねばならない。従來の浮選機では高速回轉のために磨耗が激しく使用に耐えない場合が多い。本機は低速であるために磨耗が少なく、且つ容量の大きなものとなし得るので、この目的に極めて適當したものであると考へられる。この試験は目下北海道イトムカ鑛山に於て進行中である。第4圖は同鑛



第4圖 ユニットセルとしての磨選機型低速浮選機

山選鑛場に設けられたユニットセルとしての本機である。圖の右方はボールミルの排鑛口、後方は分級機の一部、その間に本機がある。中央の箱の中に回轉子の一部が見える、箱の前面にはフロスの搔出装置が見える。箱の後方にある四角の箱はユニットセルの排鑛を分級機に汲み上げるバケツトエレベーターのケースである。回轉子の大きさは直徑約 1.2 m, 幅約 1 m であ

る。試運轉の結果は作用、動力所要量等満足すべきものである。本年中には試験完了の豫定である。

従來石炭の浮選にも鑛石用の機械がそのまま用ひられてゐた。石炭の場合は鑛石の場合に比べて特に設備を單純化する必要がある。小容量の機械を多數用ふるよりも大容量の機械を少數使用する方が適當なことは明かである。本機はその構造上及び起泡作用の性質上大きな機械とすることが可能である故、この目的のために目下夕張炭鑛に於て直徑 3 m, 幅 2 m の試験機の製作を進めてゐる。

[付記] この中試験機の研究は學振援助金及び文部省科學研究費、イトムカ鑛山に於けるユニットセルとしての試験及び夕張炭鑛に於ける大型機の試験は、文部省試験研究費によるものである。
(23. 3. 21.)